

淨土

1977 - 4

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日 澤柳省（特別寄附誌）第三二五号
昭和五十二年三月二十五日印刷 昭和五十二年四月一日發行
第四十三卷 第四号



S. Kuz

桜花に思う

桜月・花見月などの雅名のある春四月。南より駆けのぼる桜前線は北上を続け、やがて春遅い北国にもその色どりとともに温かさを

を運ぶ。百花繚乱の幕あけた。

古来より国花として親しまれてきた桜。その理由の一つに、散り際の美しさがあげられている。その散る様^{さま}が武士道の精神と合致するためであるという。確かに花吹雪舞うトンネルを散策する風情は、春暖の好季をやっと手にしたという気持ちでいっぱいになる。

しかし、わずかな風にも散っていく花びら



京都・知恩院の桜

の一つ一つを見るとき、ふと無常観に襲われる。寒風にさらされながらも厳寒のなか耐える。忍び、水ぬるむ頃芽ぶき、そして咲いたのもつかの間、一瞬にして散ってしまふ桜。一見華やかなもののなかに、生きることのむずかしさ、きびしさというものを考えざるを得ない。

日々、一刻一刻の努力が実をむすび、言動に、心の中に清く美しい花を咲かせることのできる人は少い。だれでも、そうした心情を持つて物事に対処してはいるものの、なかなかその道は険しい。

この人の生きゆく道を極めたのがお釈迦さまである。時あたかも、そのご生誕を祝い、報恩を謝す灌仏会を迎える。桜・椿^{かいどう}・海棠・菜の花など季節の花で飾った花御堂の中央に毅然として立つ誕生仏を拜むとき、その純真な求道の姿にうたれ、生きゆくための糧^{かて}を与えられたような心持にさせられる。

春うららかな陽気を十分に味わうもよい。だが、そこに至るまでの道程を熟慮し、いま、こうして生きている尊さ、ありがたさをかみしめる必要もあらう。

(長谷川 宣 丈)



諸行の中に念仏を用るは
彼の仏の本願なる故なり
——『一紙小消息』

目次

法話

- 花まつりに寄せて——不思議な説話について……滝 俊 立 ……(2)
御忌のころ——法然上人の御歌によせて……野 島 宣 道 ……(6)

<人生読本コーナー> ユーカラを描く……岩 船 修 三 ……(20)

<ふるさと紀行> 大分の四月……丹 羽 演 誠 ……(26)

いのちを考える①<誕生>

- テーマ……竹 中 信 常 ……(11)
人間の誕生——ある産科医のたわごと……天 野 一 忠 ……(12)
命なりけり……宮 林 昭 彦 ……(15)

後鳥羽上皇と浄土宗……加 藤 豊 吉 ……(29)

<随想> 心のままに〔三〕……川 内 知 光 ……(34)

お経のページ 維摩経……(36)

<表紙裏・巻頭言> 桜花に思う……長 谷 川 宣 丈

念仏ひじり三国志⑧——法然をめぐる人々……寺 内 大 吉 ……(37)

表紙 久住静雄 画
カット 大正大学美術部

花まつりに寄せて

— 不思議な説話について —

(一)

四月八日は、大聖釈尊降誕の日である。俗に「花まつり」と呼ばれている。

今を隔てる約二五五〇年程の昔、インドの北方、現在のネパール国タライ地方にあたるところに、カピラヴァストウという城があり、その城主シュッドーダナ大王の晩年に、夫人マヤーととの間に、一王子ゴータマ・シッダルタが出生せられた。この王子こそ、後の釈尊であり、この釈尊のお誕生を記念し、お祝いするのが、「花まつ

滝 たき

俊立 しゅん りゅう

(東海高等学校長)



り」である。

花まつりの日、私も子どもの頃、先年九十一歳で亡くなった母に連れられて、お寺に参詣したことを微かに覚えていいる。

お寺の本堂の入口外縁のところに設けられた小さな花御堂の裡に、甘茶で満された銅の盥の真ん中に、右手を天に指さし、左手を大地に指さした誕生仏が安置されている。小さな柄杓で甘茶を誕生仏の頭からかけ、両手を合せて拝むよう教わったことを覚えている。

浄土宗立の東海高等学校に勤務するようになってか

ら、すでに四十年近くになろうとしているが、時折、生徒達に仏教に関する話をすることがある。釈尊の話をするとき、生徒達がまず不審に感ずることは、御降誕についての話である。

(二)

釈尊は、四月八日（陰曆四月八日）、花咲き匂う庭園の中で生れられた。マヤー夫人は、土地の風習に従って婚家先のカピラヴァストゥ城から、郷里の実家にあたるコル城へ、出産のために帰国されつつあった途上、カピラヴァストゥ城東南のほど遠くない、ルンビニーの庭園で少憩をとられた。うらかな春の日、庭園には色とりどりの百花が咲きそっていた。夫人は急に産気づかれ、間もなく、玉のような男子が、この庭園の裡で呱呱の声をあげられた。

この男の子は、生れ出られるとすぐ、東南西北の四方へ、七歩づつ歩かれ、右手を天に指し、左手を大地に指して「天上天下、唯我独尊、三界皆苦、我当安之」の誕生偈を宣言せられたと伝えられている。

誠に驚いたことである。生れたばかりの赤子が、直ち

に歩き始め、言葉を話したということである。こんなことは、現実にはあろうはずがない。

釈尊をはじめ各祖師など、仏教の話には、神話・伝説的なものが頗る多いのである。釈尊は往時、前生において菩薩であったときに、行じ給うた幾多の行業によって、今生において釈尊として出現せられたと説く本生譚や、兜率天から降りて、マヤー夫人の母胎をかりて、右脇より出生せられたという降誕説話など、種々の話が伝えられている。

(三)

このような説話は、釈尊を尊崇する心情から、普通の人間とは生れられた時から、いや、生れられる前、前生からすべてについて、異っていられたのだという仰信の情から、釈尊を超人化して、種々の説話が伝えられることになったのであろう。

たしかに偉大な釈尊の人格は、当時の人々に絶大なる感動を与え、現実離れた説話が出てくることになったと思う。科学知識のまだ発達していなかった往古の時代では、現実離れた説話でも、釈尊に関しては真実である

と、絶対帰依の人々には信じられていたと推察される。

釈尊についての伝記は、単なるお伽話の類とはおのずから異なる。それは、釈尊を尊崇し、厚い信仰心から語り、伝えられてきたものである。信仰には不思議・不合理な要素の混ざることがしばしばある。テルトゥリアヌス（基督教教父派の祖、A・D一六〇―二二〇）は、「不合理なるがゆえに、われ信ずる」と言った。釈尊の伝記にも、不思議なことや現実離れの話が多い。

(四)

さて、釈尊が誕生せられ、直ちに四方に七歩づつ歩かれ、「天上天下」の偈を宣言せられたという伝記は、釈尊一代八十年の行跡に鑑みて、釈尊出世の本懐を、誕生譚に仮托したものである。

東西南北四方に、七歩づつ歩行せられたということとは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道（六つの世界）を超越して、理想の世界に進むべきことを示されたものである。これら六つの世界は、人々が死後に赴く世界のみをいうのではなく、今いきている人間の現在の生き方を表わしているものである。ある時は地獄道

に、またある時は餓鬼道・畜生道等たえず六道を輪廻している人間の心の世界の様相を表わしたものである。

六道の様相は、今社会生活をしているわれわれの心の姿を、そのままに現わしたものである。

人間に生れたことの喜びを覺らず、働くことの尊さを思わない人には労働は苦痛である。牢獄に住む罪人の如く、たえず恐怖・不安におびやかされ、嫌々働いている人の世界は地獄道であり、感謝の心なく、足るを知ることのできない境地は餓鬼道であり、人の人たることも弁えず、本能のままに趣き、人間たる思慮もなく、衝動や刺戟によってのみ行動している世界は畜生道であり、争いに明け暮して、自己を反省することもなく、他人を非難し、猜疑の心たえず、闘争を事としている世界は修羅道である。

人間道は、種々様々の様相をもった世界であり、六道同居の世界であるが、また回心・発心によって、仏にも成り、神にも近づくこともできる境界である。

天道は、一般にいう天国とは異り、やはり苦の世界であり、輪廻の世界である。いわば隠居の世界である。隠居は、一応衣食住には事欠くことはないが、なにか心

満されない苦悩の世界である。「隠居の僻み」「隠居の愚痴」と世間でよく聞く言葉である。

以上の六道は、いずれも苦悩の世界であり、悪趣輪廻の絆を断ち切ることでできない迷いの世界である。身形は立派であり、口には賢明そうなことを言っても、一皮剝いた心の様相は、誠に嫌悪すべき醜い六道輪廻の姿を呈しているのが、人間生活の現実である。そのために、人間は無始無終、苦海に沈淪して不幸からのがれることができないのである。

(五)

このような人間の現実苦悩を救済し、常住安穩の眞の幸福を齎らさんがために、釈尊は此の世に誕生せられ、そしてその大業を成就せられたのである。

かかる大業を成し遂げるための使命をもって誕生せられたからこそ、釈尊は天上天下唯我独尊であり、天地にかけがえない尊い大切なのは自分であると宣言せられたのである。その宣言の如く、一代八十年を立派に終られたのである。

釈尊は、呱呱の声をあげられた時から、自己の使命を

識っていられたように伝えられているが、普通の人間は、自己の使命や役割を意識して誕生してくるということとはない。なにかしら生れてきて、気がついてみたら、そこに自分が、現実存在していたということである。人生の意義、自分の役割は、それから自分で見出すのである。

充実した価値ある人生を送ることが、人生の意義を全うすることではなからうか。地位・財産・知識等は、人間の幸福に必要な条件ではあるが、人生究極の目的であってはならない。自分があることによって、多くの他が幸福になることが、充実した価値ある人生ではなからうか。学校で知識を習得することは、その知識が他の人の幸福実現に役立つことであり、自己の職業に精進すること、世のため、他人のための幸福を増進することに役立たなければならない。所詮、この世は縁起の世界である。多くの物や人の力に依って活かされているのであるから、自分もまた、他の人や物を活かすことに生涯をかけなければならぬ。

釈尊降誕の話をするとき、私たちの人生についても、種々ことが思い出される。



御忌のころ

——法然上人への御歌によせて——

野^の 島^{じま} 宣^{せん} 道^{どう}

○

『三冊子』に、

「師の曰、句は天下の人になへることはやすし。一人二人にかなゆることかたし。人のためになすことに侍らばなしよからんと。たはれの詞なり」

とある（たはれはたわむれ、師は芭蕉翁）。

これは、世間の人気をとる句を作るとはやさしいけれども、一人二人の達人の意になう句を作るとはむつかしいのである。天下大勢のものにわかりやすく作るのであるならたやすいことだというが、そんなことはナonsenseだよ、と芭蕉翁が『三冊子』の詞を評しているのである。たはれの詞なりと釘を刺している。このたはれの一句が利いているではないか。特定の人だけにだけわかって、庶民にわからぬ句を作って喜んでいるとは戯^{たわむ}れだよ、ということである。

そういうことは仏教の学問にもある。

たとえば、貪を説明する場合でも、貪とは有と有具とにおいて染着するを性となし、能く無貪を障え苦を生ずることを業となす、というている。

学問とは、わかりやすいことをわらんようにいうことか、といったくなる。

コップがそこにある、それが有である。そのコップをあらしめるものが有具であろう。それに対して、染着と染みつくのが欲というはたらきである。その欲のはたらきから、だんだん苦しみが出てくる。そのものに張りつけば張りつくほど苦が出なくなるのである。それを「渴きて塩水を飲むが如し」と説明してある。

コップが欲しいということを、このように一度むつかしくもっていった、それでわからそうというのが学者の筆法なのである。それでは庶民に通じない。

肩を張らずにわかるものを庶民は求めているのであって、特定の人だけにわかる法門を提げて得々としてゐるなど戯れた。法然上人はそこを踏まえて、易行易修の念仏一つを掲げて浄土開宗をなしとげられたのである。

○

仏教と俳句とは同じだというのではないが、法然上人の立教開宗の真意は凡夫のためであって聖人のためではなかった。芭蕉の句作も賢人を領かせようというのではなく、庶民のわかる句作が本意であったことは、『三冊子』の中の前記の言葉でおわかりであろう。その点では同じではないが、法然上人と芭蕉の心持ちには通じるもののあることを感じるのである。

「われ浄土宗を立つるころは凡夫の報土に生れんことを示さんがためなり」

これは開宗のお言葉である。そして特定の人のみ入る狭き門を庶民に開いた、すなわち広開浄土門である。

源平戦乱で空腹の身体と空虚の心に耐えかねて、くたくただった人々が求めていたものは、格調が高いというて、肩をいからせたり、臂を張ったりして庶民の前に立ちあがるような法門ではなかった。くたびれはてた凡夫がそれに飛びつくはずがない。それが易行の念仏一行

をもって庶民の前に立たれたわけである。

釈尊一代の經典を讀破し、當時智慧第一の善知識法然上人が、特定の人のみがわかる法門をさしおき、愚鈍の庶民にも通ずる易行念仏の道をもって、みずから生涯の行者となられたのは、凡夫の心の動搖に深い憂慮（うれ）を持っておられたからである。

○

法然上人がこの凡夫の心境を強くとらえておられたとおもわれるのは、そのお歌を見てもわかる。『勅修御伝』卷三十の第六章、上人の詠歌のくだりには、

「上人、やまとうたを事としたまわされども、我國の風俗に隨いて、法門によせては、ときどきおもいを述べられけるにや、或は門弟の中にしるしおけるを申しつたえ、或は手づから書きつけ給えるを没後に披露しける」と。そして、そこに十七首ならべてある。どれもみな、そのおりそのおりにみずからのご感想を、だれにでもわかりやすいように詠じられた名歌ばかりである。ことに

十五番目にしるされてゐるのは、上人が凡夫の心の目ごと夜ごとに苦惱にふりまわされて流動するさまを詠まれた歌で、奥深いものをきわめて平易に詠まれ、だれにもそのまま受け入れることのできるものである。

池の水人の心に似たりけり

にこりすむことさだめなければ

がそれである。

先ほどの『三冊手』によると、

「天下の人になへることはやすし。一人二人にかなゆることかたし」

というが、そんなことはたわむれだよ、と芭蕉がきびしく批判している。その意は、だれにでも通じてだれの胸にもこたえるものでなければということである。

そういう点からでは、この「池の水」のお歌は、一見平易であるが、その内には名状しがたい凡夫の苦悩がかくされている。われわれ凡夫の心の中に流動する日夜の

実態をとらえて、それをじっくりと詠みあげていられることに、大きな感動をおぼえるのである。

一見やさしい歌とおもって読んでいるうちに、中からびりびりしたものが出て来て、あにはからんや、人ごとではない自分のことではないか、とわが心をえぐられる思いである。あまりに平易なので「にぎりすむこと定めなければ」と、軽く読みすごしてしまいが、再度よみ返しているうちに、一体、池の水には変りないはずなのに、ある時にはにぎり、ある時には澄む。ある時は怒り、ある時はかなしむ。いつのまにか、池の水が自分の心になり、自分の心と池の水が、どちらがどちらかわからなくなる。そこを「似たりけり」とさりげなくうたっている。複雑を含んだ平凡、それはたとえてみれば、あの何もない帽子の中から花が出て来る、ハンカチが出て来る、しまいには鳩まで出て来る奇術のごとくである。

この世の中は、人の心さえにこらねば住みよいのであるが、それがぎりもなく澄んだり、にこったりするので、住みにくい世の中になるのである。

本来、きれいな水がなぜにごるのであろうか。それは風や雨のためである。池の水は風のためにかきまわさ

れ、雨にはげしく叩かれて、池の底深く沈澱する泥が動くためである。本来きれいなはずの心も、なぜにごるのであろうか。人と人とのふれあいの中に、軋轢や摩擦が起きると、心底深く蔵されている煩惱の泥が動き出すからである。

唄ぎわに土筆のびわれも生きてあり

なあに、おれもまだ生きているぞ、ばかにするな。弱音とも強気とも受取れる言葉を吐きながら、ある日「死んだほうがましだ」といい、ある日は「死んでも死なぬぞ」と、この二つの心の戦いによるめいている姿をあらわになって、そこに凡夫のうずきを強く感じ、転じてそのままそれが自身のうずきであることを表白されたのが「池の水」の歌であるまいか。

格調の高いところに立って、救済とは何かを論ずることも宗教として大切なことであらう。しかし「われ浮土宗を立てるころは」凡夫の救済にあるとして、易行念仏を一すじに勧められ、大衆の身になって凡夫に相應しないものはこれを擱き、凡夫にふさわしきものを選んで

八十年、堂々と進まれたのが法然上人である。

その易行なるをもって上人の教えに帰依する民衆は多かったが、伝道の道は必ずしも容易ではなかった。凡夫が救われる道に確信をもたれた上人が、死をも怖れず、念仏普及に邁進されたことは、『勅修御伝』卷三十五の、「念仏停止上人流罪」の巻に、

「われたとひ死刑におこなはるとも、このこといはずばあるべからずと、至誠のいろ、もともと切なり」

とある。この一文を見ても明らかである。

○

仏の御修行中に、捨身餓虎の話がある。餓えたる親子の虎に、生身を与えてこれを救った話である。宗祖法然上人は正に仏作仏行の人であられたと思う。戦乱つづきの世に身心ともに飢えた民衆に、上人ご自身のからだを張って、死刑、流罪をものともせず、ひたすら済度の聖行を貫かれた八十年は、全く仏作であり仏行であった。

建暦元年十一月十七日、花洛に還帰の宣下を蒙り、二

十日帰洛されたというものの、上人は日來不食の所労増氣したもうて、この三、四年よりこのかたは耳目朦昧にして色を見、声を聞き給うこと、ともに分明ならず、翌二年正月二日以後は、さらに余言をまじえず、ひとえに往生のことを談じ、高声の念仏たえずして、睡眠の時に舌口とこしなえに動く。これより日に日に病い進み、二十五日臨終にのぞみたもうとき、「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」の文をとなえて、ねむるがごとくして息たえたもうたのである。

申し分のない人生を願うのは人間すべてである。それがかなわぬのは貪瞋痴の心のにがりのためである。その願いのかなわぬ現実には、人々は苦しみ悩んだのである。この人々に仏の易行易修の念仏の法を伝えて、救済の生涯を終られたのである。

それより八百年、法灯不滅、ただ口称念仏の一行のみで、凡夫が浄土に生れて申し分のない境界にはじめて入ることができるといふ教えを信じて、来る日も来る日も華頂山の御廟に詣ずる人々は引きも切らない。今、この偉聖上人の御忌を迎えて、「池の水」の御歌を通して、われら凡夫に寄せられた慈恩に深く感謝する次第である。

シリーズのテーマ

小川のほとりを歩いていたら、川かみから一枚、大根の葉が流れてきた。そしてその後から、坊さんが一人、フウフウいいながら駆けて来た。

「何をそんなにいそいでいるのですか」と声をかけると、「大根を洗っていたら、葉が一枚流れてしまったので、それを追いかけてるんですよ」と、一目さんに駆けて行った。

これは良寛さんにまつわる小話である。大根の葉っぱ一枚に宿る「いのち」の大切さを物語っている。いのちを「ねうち」といいかえてもよい。ものの持つ「いのち」である。

一人の人の「いのち」の重さは地球よりも重たいといわれる。アフリカの奥地で人命の救済に生涯を捧げたシュヴァイツァー博士はうたっている。

我は生きんとする生命にとりかこまれた生きんとする生命である。――

生の肯定とは漠然と生きることをやめて、生の真の価値をもたらさんがため、畏敬の念を以って、自己の生に献身する精神的事業である。

四月八日、偉大なる生命がインドの一角に誕生し、この「いのち」が二千五百年の今日まで、何十何百億の人間を救ったのである。

いくら讀えても讀え切れぬ「いのち」の尊厳を、ここに改めて讀え、いのちの価値を究めようではないか。

(竹中信常)

いのちを考える

(一)

—誕生—

人間の誕生

—ある産科医のたわごと



あまの かず ただ
天野 一 忠

(天野産婦人科医院長・医博
神奈川県産婦人科医会副会長)

去る日友人の大正大学教授の安居香山氏より、「生命は尊し」というような題で、何か書いてくれとの依頼を受けた。

平素人の生命、しかも母と子という二つの生命の鍵をにぎって仕事をしているものとしては、人一倍神経をつかっている問題である。

ところが、その後『浄土』なる雑誌が送ら

れて来て編集者より、本月は「誕生」という「テーマ」ですからよろしくと念をおされた。

さてさて、仏教にはあまり縁のない産婦人科の医師ではあるが、「人間誕生」というドラマティックともいえる場面に数多く出会い、母と子の生命を見守る立場のものとして断ることもできず筆をとった次第である。

仏教的には門外漢の俗人の記事として、こ

寛容でお読み頂ければ幸いである。

そこで折角の機会であるので、「釈尊誕生」に関する記録はないものかと、書店の店頭で関係書籍をあさってみたが、急場しのぎではどうにもならず、安居教授にお願いしたところ、大道社発行『お釈迦さま』というまんが絵本が送られてきた。

いささかあきれながら一見すると、仲々のもので、子供達にわかり易くお釈迦さまの一生を要領よくまとめたものである、しかもお母さん方へ同時に解説文があり、内容も専門的な高度なものであった。

解説によると、このまんが絵本の古典は、インドの文豪アシヌヴァゴーシャ著の『仏所行讃』という権威ある古典よりのものであるしことを知った。

この中に釈尊誕生の記録があり、これにより私なりに不遜にも考察を試みてみました。釈尊の誕生は、西紀前五六四年四月八日、ルンビニー園に生れるとあるが、釈迦族王家

の待望の王子誕生で、一族より祝福されたようである。

というのは、父浄飯王が五十七歳の晩年の王子であつたからである。

生母マヤー夫人の年齢は明かでないが、相当な年齢であつたことも考えられる。

しかも一週間後に死去されているが、いまから二五〇〇年前のことであるから、今日の進歩した産科学と比較し幼稚なものであるから、或は分娩による疾病、産褥熱等によって死去されたとも推定される。

今日の産科学でも産婦が三十歳以上の時には異常分娩、いわゆる難産が多いので、高年初産婦として特別に警戒される。

また一説に釈尊は生れてすぐ七歩あるき、一指は天、一指は地を指し「天上天下唯我独尊」といわれたとか。仏教的な解釈は別として、分娩の経過中に上肢下重、普通は分娩時頭部より出向するが、頭部より前に上肢が出る場合は仲々の難産に結びつくものである。

なにしろ昔々のことを一介の藪医者が想像すると、仏罰になる恐れがあるので、積尊の誕生についてはこのへんで終りましょう。

さて話は「誕生」にこだわりすぎましたが、実は私の亡父は晩年母を関東大震災でなくしてから、朝夕仏前にて『般若心経』を唱えた熱心なる信仰厚き人でした。

そのためか、小生は戦時中南方ニューギニアの第一線にて、愈々これがこの世の最後かと覚悟をきめたことが両三度ありましたが、その時自然に「南無阿弥陀仏」なる称名の六文字を唱えました。これを唱えることにより吾を自覚し、同時に心の安静を得た経験があります。

こんなことから、自分はやはり仏教徒の一人であったかと、今更に自分を発見した場面がありました。

職業柄母と子の二つの生命を取扱う関係で永い間には色々のことがあります。

以前は重症の患者に医師として最善の努力

をしたにも拘らず力及ばず、不幸な転帰をとった場合でも、「先生にこれだけ色々とやって頂いたのであるから寿命です」と、あきらめてくれたものであるが、今日は少くとも、死という厳肅なる場面にぶつかると、十中の八、九は医事紛争に巻きこまれることとなる。なまじ中途半端な医学知識が問題を起してくることが多い。その結果、自然に、医師の方も、本来の使命を忘れて、防衛的治療で終ることとなる。

日常診療に従事しているものとしては、妊婦の一人一人が無事にお産が終りますように祈りをこめて立会って一人である。また生れた子供達が無事に何等障害なくすくすくと、元気で育って欲しいと見守っている。

あわただしい今日の世相は、個人個人が自分の生命の尊さに認識不足と思われる行動が数多くみられるのは嘆かわしいことである。自分の生命の尊さを考えないから、他人のことは尚更になるのであろう。

そこで仏教関係者をお願いしたいことは、幼時より仏教的感覚を機会あることに与えるようにして欲しいものです。

人へのあわれみと同時に、自分へのあわれみを忘れぬよう日々反省したいものです。

健康についても、無病息災結構ですが、一病息災が平素の健康維持に必要でしょう。

凡人には仲々出来ぬことで、医者の不養生

命なりけり

○

生命は不思議なものである。しかし、現代生活においては、生命の不思議さがわからな

とか、小生の如きはこのようなことを書くのはおこがましい限りです。

京の祇園の俗曲に「お老しより、お老しよりは先がない、ささ遊ばんせ、お若いのお、若い人は先がある、ささ遊ばんせ」とあるが、生命のある限り、「よく学び、よく働き、よく遊び」を「モットウ」に大事な生命を全うしたいものです。



みやばやし あき ひこ
宮林昭彦

(大正大学助教授)

くなくなってしまった。人が生命をうけるのは別に不思議でもなんでもなくなってしまう。あたたまえのことである。「子供は授かりもの」といわれるが、現代は子供は作るも

のともいわれる。子供は作るもの、できてしまったものであるから、そこに何らの責任も感ぜず、まして誕生する生命の不思議さも、そこに感動を味うこともない。そのために、育てるのが面倒くさくなってしまったという単純な理由で可愛い幼児を殺すような極悪非道を平気で行うことにもなる。

やはり生命は不思議なものである。不思議とは、思議すべからざること、人間のほかにいではどうすることもできないことがらである。このわたしの生命があるから、生きていることができる。命が亡くなってしまった状態は、いうまでもなく死である。このわたしを生かしている生命は、まぎれもなく、このわたしのものである。わたしの命であれば、自分自身で、自由に勝手にすることができるかというところにあらず、どうすることもできない。誰れでも長生きをしたいと思います、寿命のない人は嬰兒でも、働きざかりの人でも、この世から別離をしていかなければなら

ないし、逆に「命長きは恥多し」といっても、恍惚状態となって病床に苦しみながら死の迎えを待っている辛さを感じている人もある。

自分の命でありながら、自分の力ではコントロールすることできない、どうしようもない生命である。健康で長い命を保ちたいと念じて叶えられず、逆に安楽死したいと思ってもままならず、どうすることもできない命である。

かように思いをめぐらすと、この生命は、わたしのものではありません、自分のものではない、まことに不思議なものである。

まさに前世の因縁によって生じたものである。詩人の坂村真民氏の『念ずれば花ひらく』という詩集のなかに「めぐりあい」というのがある。

人生は深い縁の不思議な出会

世尊の説かれた輪廻の不思議

その不思議が今のわたしを生かして行く
大いなる一人のひととのめぐりあいが

わたしをすっかり変えてしまった

暗いものが明るいものとなり

信ぜられなかったものが信ぜられるよう
になり

何もかもがわたしに呼びかけ

わたしとつながりを持つ親しい存在とな

った

この詩のように、生命は単に自己ひとりの
ものでなく、限らないつながれのなかの存在
であり、衆生無辺の生命につながれている。
このわたしの生命である。

○

年たけてまた越ゆべしとおもひきや

命なりけり小夜のなか山

これは西行法師の名高い歌である。

この前にこの小夜(さよ)の中山を越えたと
きには、年をとってからまたここを越えるよ
うなことがあるなどとは思ひもよらなかつ

た。それなのに、今またこのようにここを越
えることができるというのも、命あればこそ
のことだ。

と、生きながらえたことの恵みをしみじみ
と感じた心の歌である。

人間の苦しみ悲しみの重きあゆみを一日一
日と続けて来、今日もまず無事に日暮しする
ことができたことの幸せに感謝をこめて、西
行法師は「命なりけり」と詠まれたにちがい
ない。人生無常ということをしみじみと思う
とき、この「命なりけり」は心の底にしみ透
るような響きがある。

命があるということは、生きるということ
は、やはりすばらしいことである。

生命があつたればこそ、小夜の中山もまた
越えられた。生命があつたればこそ、春の朝
にまた出会うことができた。英文学者の松浦
一先生の歌に、

めぐりあふ春の朝(あした)よ美しき

夢は見果つることもあらなく

とあるが、春の朝を迎えて、思わずめぐりあえた、ほのぼのとした心持ちがあらわされている。まことに幸いにめぐりあえたという気持ち。これは当然会うべきものに、会うべきときにおいて、何の不思議もなく会ったという気持ちではない。春を迎えて心に結ぶ美しい夢はいつ見果てるといふこともない。ここにも「命なりけり」という実感がこめられているのである。

○

春になると、黄色の菜の花が美しく咲く畠の道をぬって、白装束のお遍路すがたを、四国、西国ではよく出会う。その手には、金剛杖がしっかりと握られている。しかし、わたしたちの人生において、本当に安全たよりにしてもたれかわる、絶対大丈夫という金剛杖はどこにあるか。これはいい人であると

一生懸命にすがっていると、突然の病気であの世に行ってしまう、この世に淋しくひとりとのこされてしまう。夫にたよっている妻は、夫が死んでしまうと、それで杖をとられてしまう。子供にたよっている親は、子供が死んでしまうと、やはり杖を取られてしまう。人生万事かくのごとく、たよりとなるものなく、自分みずからが、すでにたよりなき存在といわねばならない。

「転ばぬさきの杖」といわれて、金剛杖をわたしたちは、いろいろのところから持たされていることが多い。しかし、この人生という旅で、この杖を渡されても多くは玩具にしてしまうだから、振り廻してみたくもなる。軽い、重い、長い、短いといって遊ぶこともある、若いから無用と思う人もある。漸く人生の旅の重さを感じるころになると、玩具にしていたり、無用と思われていたものが、必要になり、金剛杖を力として歩み出すことになる。金剛杖は仏さまだ。仏のみ教だ。もっとと

もたよりとなる柱だ。というように眼が開かれて、生きる力というものを感ずるようになってくる。それは信仰の力といってもよい。

人間の旅は、はじめは金剛杖を遊び、つぎには戯れにつくが、やがてこれをたよりに力とし最後は全く杖のみの旅となるのである。

かように、わたしたちの人生は、最初から安心が決定するのではない。自分のすること、なすこと、みんなどうしようもなく、世間の物笑いになり、恥をさらし、どうにもならなくなった自分を、疑心暗鬼のなかに仏の手に委ねる。ふかい悲しみのなかに沈みながらも自分はもうこれより仕方がない。このまままで一日一日一生懸命生きて行こうと思うようになったときから、信仰の世界が開けてくるのであろう。

どうしようもない小さな生命が、つよく生きる力にはたらくのは、限りない大きな根源の生命とふれ合うことによって、大生命にいだかれることによってはじめて成しうるのだ

はないか。

仏教では、この生命の根源を阿弥陀仏として示されている。阿弥陀仏は、生命あるすべてのものと、悉く無量寿無量光のなかに救いとうとする仏である。無量寿無量光は、仏の側からのよびかけということのみでなく、理想をもつ生きとし生けるものの根本的な欲求にほかならない。これは、宇宙人生の本体にそなわる本来のなすがたなのである。現実において有限な生命と不完全な力しか發揮できないわたしたちが、一面において、心の奥底からたくましい生きる力や、念願が湧いてくるのは、もともと、わたしたちは宇宙の本体からあらわれたがためである。わたしたちの命は、阿弥陀如来により宿り、生かされ、やがて永遠の生命のふところに生まれてゆくのである。

阿弥陀仏と十こえとなえてまどろまん
ながきねむりになりもこそすれ



ユーカーラを描く

岩 いわ 船 ふね 修 しゅう 三 ぞう

(洋画家)

(一)

ボクが絵かきになったというのは、今から考えてみま
すと、小さい時からの環境がそうさせたのではないかと
思っているんですよ。

私は古い呉服屋の息子でありますし、私の先輩である
同郷の田辺三重松さんも呉服屋ですし、日本画壇を広く

見渡しますと、梅原竜三郎さんは絹物問屋の息子さん、
安井曾太郎先生は木綿問屋の息子さんです。ですから梅
原さんの絵は絹のような感じがしますし、やはり安井先
生は木綿のような手堅い絵ですね。また外国でみます
と、セザンヌのおじさんは婦人洋服屋でありましたし、
ルノワールは婦人帽子を作っている家に生まれました。
こうしてみますと、何か色彩というものに幼い時から触

れている、そういうことが大きく影響しているのではないかと思うわけです。

それから自然環境では、ボクの生まれ故郷はまあ十九歳まで函館にいたんですが、函館というところは日本の中ではとてもロマンティックな街だったんですね。古くから開港されたために洋式な建て物が立ち並び、教会も多く、そして小さい頃はその教会の鐘の音を聞いて学校などに通って、坂道もあり、港もみえて——どこからみても絵になるような風景だったんです。しかし、うちの父というのは、金儲けなど一回もしたことのないような親父でして、今でもありますが、四万坪もの庭に夢中でして、一生かかって死ぬまで庭作りをやったわけなんです。私は、その庭の図面を絵に描いたりしたんですが、そういうものも私の血の中に入っていると思うんです。

しかし血というのは、たとえば東洋人の血とか、西洋の伝統とか、これはあるわけでしょうが、ボクは環境がもっとも多く作用すると思うんですよ。まあ極端な話ですが、ピカソが函館に生まれていれば、日本的には可成の絵かきになっていたかもしれないですが、*「世界のピカソ」*とはならなかったんじゃないですか。それだけに、

環境の違いというものは、大きく影響していると思うんです。

この環境というのは、ある年令になったら自分で作らなければならないのだと思います。ただこの場合の環境とは、何も金があるからいい環境だとか、平和な家庭だからいい環境だとか、そんなことではないわけです。いわゆる芸術家にとっては、自然の美しい世界の中で生活しているとか、それからたとえば先程話しましたように私の場合には田辺三重松さんが近くに住んでおられて、まわりに絵を描く人が非常に多かったとか、その中に私が育ったということなんです。だから「将来絵かきになる」と思ったのは中等学校一年生の時からでした。その時にたまたま東京の叔父が、私が小学校時代から絵が好きだったもので、油絵道具一式を買ってきてくれたわけなんです。その時点からはっきりと絵かきになることを決心したわけなんです。それはまったく好運だったんですね。ボクがほかの職業についていたら、全然ダメだったかもしれないですよ。

昔から、*「三文文士に貧乏絵かき」*などといわれまして、絵かきなんてまったくどうにもならないものだった

んですけれど、私の場合においては、とにかく絵かきになろうなどということは、そういう環境から自然に生まれてきたということは確かですね。たまたまそうして東京へ出て、青山熊治という先生に会えたことが、私の絵かきとしての道を決定づけたんですね。ですからその先生のおっしゃった言葉は、私の絵を描く姿勢態度に忘れられない大切なものを教えてくれました。その一つは、「どんな絵をかいても画心を忘れるな」ということ、また一つは「どんな汚ない姿をしていても恥じることはない、汚ない絵をかくことこそ恥しい」など、とにかく絵の指導というよりも人間としての道を教えてくださいました。

それから次に大事なものは、人と人との出会い。これは大切ですね。たとえば有名なピカソやマチス、私も二十代の頃お会いしたことがあるんですが、ピカソが私のオーダーを後ろにまわって取って下さったこと、絵を自分でもってきて下さったことなど、私には大いなる感動でしたし、芸術家そのものに対する考え方も大きく変りました。ともかく、人間の価値というものは、自然の中のそういう環境によつて決まるんじゃないかという

ことです。そしてその環境というものは、自分で作って行けるものだという認識が大切なんです。

(二)

私は終戦後、函館に再び帰ってきましたが、函館に帰って画業に専心したことはとてもよかったと思います。というのは目まぐるしい東京では、私のようなものは時間的にも精神的にも奪われるものが多かったでしょうし、ともかく地方にいて絵を描く仕事を有効になしてきたと思うんです。ですから私は今六十八歳ですが、これから死ぬまでこの函館で絵をかき続けるつもりです。

私が最近考えていることは、あまりまわりのことには気を付かわないということです。人生の持ち時間も少なくなってきましたから、いかに有効に絵をかいに行るか、ということ以外は考えないことにしているんです。そのためには、自分の心のままに絵をかくことこそ大切だと思ふのです。

ところで絵かきというか、芸術家というのは、大変なうぬぼれ屋なんです。私も最近では大分わかってきまして、他人の絵などを鑑賞する場合でも、自分が「これ

はうまいな」と思ったら実は数段上のすぐれた作品であり、「これはたいしたことがない」と思うのが自分と同じ位の作品であるというような認識をもつようになってきました。もちろん、自分の作品に対してのある種の自信は必要ですが、それが過信になってしまつて威張るようなことはよくないことです。自信と自作に対する不安は同居しているんです。そうした感情がなければ、作品の成長も決してありえません。

しかしこのようなことは、私のような年の人間がいえることだとも思うんです。若い頃には、うぬぼれとか思い上がりというようなものがなければ、とつてもやって行けるものではありません。現実世界の競争の激しい中では、決して成長できるわけがないのです。

さて先程お話ししましたピカソも、「この世に天才はいない。すべては努力によるものだ」といいましたが、しかしピカソ自身の環境はといえば、とても恵まれていたものだったのです。美術学校の教師をしていた父、愛情の深い母、そして空想的な話が好きだった祖母、つまり父からは絵の技術、母からは愛情、祖母からは想像力といったものを受け継いで、幼い頃から暖かく育くま

れていたのです。その中で私は、ピカソが母から教えられたという「愛」ということについて、次に考えたいのです。ともかく芸術にとっては、愛の世界が大切なのです。すべての芸術作品は苦しみとか悲しみとかいった人間性の愛から出発しているのです。愛の世界がなくては、私は絵をかきません。芸術家としての立場から、今、「愛情を大切にせよ」ということを強くいいたいわけです。これが自分を表現する道ですし、今後の生活はまさに「自分を燃焼させる」ということです。いつまでも若く、燃え尽きたい、ということですが、そのためにはかの亀井勝一郎先生がいわれたように、「精神力も重要だが、まず肉体の健康が第一」ということを、今ことさらに感じているのです。

(三)

私は最近二冊の『ユーカラ画集』——アイヌの民謡・神話——を出したんですが、発想はすでに戦争中からあったのですが、その要因は、不思議なことにアイヌの物語（ユーカラ）には絵がないということからだったのです。その風俗や民具などを絵にしたものはあったんです

が、その壮大な叙事詩に付される絵画はなかったんですね。ご承知のようにアイヌの神話というのは、教訓的なものではなくて、まったく生活に密着していて、たとえば自分たちの生活に役に立つものは、動物でも植物でも山でも川でも、みんないい神様なんですね。そして役に立たない害を及ぼすものは、悪い神様でして、ともかくそういうように生活そのものの中から、ほほえましい数数の民話が作られているわけです。そして、その姿勢は大変おらかなのです。ともかく、そうしたアイヌの世界を絵に描いてみたかったです。

そこで具体的には、有名なアイヌ詩人の更科源蔵さんに詩を作っていただいて、それに絵を添えたわけです。そして第一冊目には大人のためのユーカラ画集を製作し、二冊目には子供向けの画集を発表したのです。

ところで、現代のアイヌの人たちというのは、先祖のことを忘れているという感があるんですね。私はアイヌの人たちに、先祖への自負心をもっていただきたいんですね。今度の画集は、そういう意味で、アイヌの人たちへの作品でもあったわけなんです。画集自体は装本等、いささか贅沢なんです、これもよくいえば読み捨てに

されないようにという念願からなのです。いずれにせよ、これでユーカラの世界を描く絵については、一応一段落したと思います。

そこでこれからは、最後の残されたエネルギーをもって、私の幼年時代から現在にいたるまでの私のまわりにいたたくさんの人びとの絵をかいてみたいと思っています。この大作は——と、まだやりもしないうちから、こうしておしゃべりするのには、ボクの性格であって、ボクはまず自分のやることを発表してしまうんですよ。そうすると、どうしてもやらないわけにはいかなくなってしまふ、"自分で自分を追いつめる"ということですか。それが結果的には、計画が逃げてしまわないことになるんです。

ところで、芸術の製作にはもちろん体力が大切ですがやはり精神的な要素こそ重要な領分を占めています。ここでは遊びも貴重な役割りを果たすものと思うんですね。仕事の内容がとても神経を使うものですから、相応の遊びも必要となってくるわけです。もちろん、夜遅くまで遊んだ後から、それを取り返すかのように夜を徹して眠くなるまで製作に没頭することもママあるわけで

す。現在のところ、一応まだ体力の方も、私のいうことを聞いてくれますし、健康にも比較的恵まれてもいるわけです。

ともかく今後もできるだけいい仕事をして行きたいと思つています。

〔文責編集部〕

NHKラジオの朝の番組「人生読本」(六時四十分から五十分まで)の時間では、さまざまの分野で生きてこられた多くの方々の、その深い人生体験に根差した滋味深いエッセイ風のお話しを長く放送されてきました。このたび『浄土』誌においては、その折々の放送から毎月一篇づつ適宜に選ばせていただいて、誌上転載させていただくことになりました。いろいろなお立場での貴重な経験とその長い人生の良識からは、私たちがつねに汲み取らなければならぬ多くの教えが含まれていると思われまふ。ただ惜しむらくは、生まの放送と違って、その暖かみに満ちた真摯な語り口が、直載簡明に読者のもとに届けられるとは思われませんが、ともかくもこの誌面に掲載させていただいて、そのお話しの意味深い内

容から、人生のよすがとしてのなにかを感得して下さるよう願うわけです。もちろんすでに実際の放送をお聞きになった方もあるかもしれませんが、本欄の活字化された文章を改めて味わっていただくのも決して意味のないことではないでしょう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、今回掲載させていただきました「ユーカラを描く」は、北海道函館にお住まいの洋画家・岩船修三さんのお話です。幸い岩船さんは函館称名寺(須藤隆仙住職)のお檀徒でもあるそうで、私どもにお願いに快く承諾して下さいました。岩船さんには、『ユーカラ画集』や『連作アラスカ』などのすぐれた作品があります。なおこのお話しは、三月七日(月)から九日(水)にかけて放送されたものです。

ふるさと紀行

大分の四月



に　わ　えん　じょう
丹　羽　演　誠

(大分県佐賀関町正念寺住職)

○ 淡路屋の風

「彼岸のころは、可愛い子供を船に乗せるな」と、漁民の間に昔から伝えられている。春の彼岸のころは、気候の変化が急で、突風が吹き船の遭難が多い。そのため昔から漁民の間にこのように語られている。

佐賀関は、九州の東端、豊後水道と瀬戸内海に接する半島の一村にて、船の要路でもあり、又潮流の速い所、更にリヤス式の海にて瀬や島の多い所である。

江戸時代の末、この町に淡路屋という海産問屋があり、財産も多くあった。この彼岸の頃、大潮のため、島に磯遊びに娘が出掛けた。丁度、帰途についた頃、突風が吹き、船もろとも、海の藻屑と消えていった。町の人はこの娘の死を哀れんで、その死を痛んだ。このころ突風が吹くと「淡路屋の風が吹く」といって、娘を哀れんだ。美しい漁民の心がしのばれてならない。

○ イボ地蔵



ある時、漂流している坊主さんを連れて漁船が帰港した。自分たちの顔と違っているので、深くその坊主さんを尊んだ。坊主さんは、港を見下す山に東林庵と云う庵を建てて、仏に仕えた。

肥後の細川侯が内侍仏としていた観世音菩薩を本尊とし、江戸時代に一漁民が航海を祈って寄進した三十三体の観世音菩薩を祀っている。先程、書いた淡路屋の墓も参道の中腹にある。

このお堂の裏山に石像の仏が祀られている。漁民は「イボ地藏」と呼んでいる。頭にイボの様な髪のある型があるからだ。阿弥陀如来である。台に「魚鱗」と二字が書かれている。

時代は分らないが、漁民の信仰厚い人が中心となって安置されたのであろう。

赤い「ヨダレ掛」をして、眼下に豊後水道を眺め、港に出入する漁船や発動機の音を聞き、今日の無事を祈っている姿は、尊いものが湧いて来る。

ところで、仏の顔を拝していると、次の様なことが思ひ出された。

ある日バスを待っていると青年が話をしてもよいかと私に寄って来た。

「私は機帆船に乗って、豊後水道から太平洋にと航海しており、もう三年になります。時折、この豊後水道で、水死人に会うのです。水死人が船に近よって来る、したってくるか、助けを求めている様です。しかし波が荒くてどうすることも出来ず、船員がすまないがこれを着て下さいとシャツや、果物を投入して参ります。しかし何かしら心に残るものがあるので、入港するとお寺に行ってお経を読んで頂くのです。それを行わないと発熱し、うなされるのです。どの様にしたらよいのでしょうか。不思議で不思議でたまりません」

私は、「あなたのやさしい心に救いを求めて来ているのか知れません。その折は、念仏やお経を誦し、日頃写經をしておいて、水と果物と一緒に念仏称して流してあげなさい。それが一番の方法ですよ」といいました。

これらの水死人を守る如く、また魚の霊を守るため、この魚鱗仏が静かに海を祈っているのかと思うと漁民の純朴な先祖の信仰が、今日でも生きているのを思うので

す。

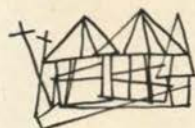
香煙のたたぬ石仏の顔は風雨にさらされながら微笑をたたえて、海の底を廻っている様に感じるのでした。

× × ×

風の吹かぬ海は、波静かにて、沖に点在する船は鯛を釣っているのでしょうか。日おいをした船は、「さざえ」を捕っている海女の船でしょうか。磯に動いている人は若布を切っているのでしょうか。四月の海は、ほんのりと霞んで島を包んでいる。

『浄土』誌も今月号より、新しい企画を盛り込んで、読者諸賢により満足していただくためにも、内容の一層の充実に努力いたしております。この上はさらに飛躍するためにも、皆さまの暖かいご支援をお願いする次第です。皆さまの便りや激励のお言葉をお待ちします。また『浄土』誌の購読希望者の方々を広くご紹介下さいませ。

法然上人鑽仰会



後鳥羽上皇と浄土宗

加藤 豊吉
かとう とよきち

(後鳥羽法皇景仰奉賛会)

昨年二月八日の山陰中央新報文化欄には、「後鳥羽上皇と隠岐島」(村上兼巳編)を紹介し、さらに石上玄一郎氏の論評が載っていた。その中に「浄土宗に帰依して念仏三昧におくられた、院の晩年の姿を、宗門の歴史の中に正しく位置づけて欲しかった」云々があった。

私が浄土宗に入信以来、斯界の学者に教えを乞い、また幾多の僧侶に接したが、後鳥羽院に関することは、一度も聞いた事がなかった。そこへ右の記事を一読し、私の好学心は燃えた。そして調べて見ようと思い立ち、資料を集め、多忙な検診業務の合間に寸暇を惜しみ主

に夜間をこれに当て、ようやく書きあげた。その際に史学者でもなく僧侶でもない、浄土宗の一居士の愚論ではあるが、史実に忠実である様努力したつもりではある。

この史的根拠に基いて、従来のイメージ打破、浄土宗史改稿へのデモンストレーションとして、本年五月十八日、上父終焉の聖地、隠岐郡海士町苅田の御火葬塚で、浄土一宗を挙げて、後鳥羽上皇の追善大廻向を厳修せんとするものである。その真意を私の小論中より披翠し概況を述べようと思う。

中世紀の日本は、源平の盛衰と、公武両政権の対立抗争の明け暮れと云っても過言ではなからう。その時にあたり律令的天皇親政を樹立せんとせられたのが、後鳥羽上皇である。上皇は極めて御英邁にましまし、御親政に於ては、律令を恢復し万機を振肅し、朝威宣揚に正念を傾け給い、

奥山のおどろが下も踏み分けて

道ある世ぞと人に知らせむ

の御精神は、上皇の一生を貫いたのである。上皇は頗る多才にておわし、とりわけ歌道に卓越し給い、多くの御製をお遺しになっていることは既知の通りである。

後鳥羽上皇は列聖中信仰心篤い御方で、なかでも浄土宗に極めて深い因縁の上皇であったと云うのは、念仏停止、宗祖配流、門下の処刑等逆縁にあったが、承久の乱に破れ給い、御自らの御配流後は、浄土宗に深く御帰依になり、阿弥陀如来を念じ、その本願を固く信じ給い称

名念仏に依り安心立命を得られるという奇縁にあったからである。

念仏停止というのは、浄土門と聖道門の、教理教判の相異から、又聖道門教団の怨憎と羨望から、浄土門教団（法然上人とその門下）の称える口称念仏を停止させ、法然上人及びその門下中の急進派を処刑す可く、聖道門側が八宗同心（奈良六宗と天台・真言宗）にて、後鳥羽院に訴えた事件である。

一方後鳥羽院は神を尊崇し、仏を信奉し給い、法然上人を始め天台座主慈円、泉湧寺開山俊茂等の高僧について、御授戒になり、又明恵、聖覚、承円について、仏道を修学せられ、御自ら読誦、勤行、写経等遊ばされている。このように仏道に御精進なされていたから、南都、北嶺の執拗なる強訴に対しても、応じることなく、偉威を示されていたのであるが。しかしかつて白河法皇の御名言、「加茂川の水の流れと、双六の賽と、山法師には」云々と嘆かれた如く、山法師の暴挙の前には、院の至上権力も妥協を余儀なくされたのである。

上皇は常に幕府の専横に宸襟を悩せ給い、承久三年（一二二二）遂に北条義時追討の院宜が下され、承久の乱

となつたのであるが、御雄策空しく敗れ給ひ、逆賊義時は、玉体を絶海の孤島隠岐海士村刈田に配流し奉つたのである。実に古今未曾有の大逆乱である。

かつては九重の雲の上におわし、百官を従えさせられ、万機を御英断遊ばした上皇の行在所における御日常は真に惨しく、諸行無常、愛別離苦を尊き御身を以て悟らせ給ひたる事、誠に恐れ多い極みである。

歌聖の誉高き上皇は、大御心を歌に託し給ひ詩情なき者をも涙をそらしむるものがある。

蛙鳴く刈田の池の夕だたみ

聞かましものは松風の音

始めうちは都よりの便りもしばしばあり、都恋しさの御明け暮れであったが、流れ行く歳月は倅なき人の世の無情を、知らせ参らせた事であらう。

花の色鳥の声にも慰まず

浮世を悟る飯の宿りは

この御製を拝しては往時を偲び参らせて、胸迫る悲憤の情を禁じ得ない。

我こそは新島守よ隠岐の海の

荒き波風心して吹け

名にしおう日本海の荒波は巖に砕け、荒涼たる孤島の悲哀は、切々として大御心は諦観を越え絶望の深淵に漂没し給うのであった。

後鳥羽上皇は既に述べた如く信心篤き御方であった。

若年期には一般の慣習に従わせられ、法華経を御信奉になつてゐた。その後は御歳と共に宗教的体験も豊かにならせられ、院政後期より、次第に法華経の影は薄れ、法然上人の浄土教信奉に回心せられるのである。そこには浄土教支持者としての、承円、明禪、聖覚等高僧のアドバイスの影響が大きかったが、特に範光入道静心の最後の模様が上皇回心に重大な契機となつた事は事実である。彼の信じ切つた安心立命し得た臨終の態度は、強く上皇の脳裡に印象づけられ、往生浄土の実相を問のあたりに遊ばした上皇の御心中は、強く浄土に惹かれ生涯を

通じての御信仰の指針を決定遊ばされたと拝察できるのである。

上皇は隠岐御配流に際し、定朝作の弥陀三尊、空海筆浄土三部経等御隨身遊ばされ、また供奉の人選も浄土宗信奉者を召されるなど、浄土宗に深い御執心の程が窺われる。隠岐行宮所における御信仰の様相は、御配流の年月とともに加速度に深まり、晩年に於ては凄惨なまでに念仏信仰は募らせ給うのである。ある時は、信仰の帰快に苦しみ、出離の道の解決にも悩ませられた事もあり、宗祖を慕い念仏三昧の御日常であったのである。この熱烈なる浄土願生の御念は、高き教養と文才と相俟って至高不滅なる文学「無常講式」の御製となって御垂世給うたのである。

浄土願生の御念が募れば募る程、空虚な御心境には寄る辺なき身の老い行く先々が案じられ、不安と慟哭は交策し述懐となり、切々たる哀情を筆に託さねばならない迄に深刻さを加えたのである。晩年における行宮所の木の間に洩れる高声念仏の御声は、切実なる人生観、深刻なる無常感が、魂のふるさと極楽浄土一の絶叫であったのである。

かくて銀河巡りて春秋十九星霜延応元年二月二十二日
哀切悲愁の中に宝算六十年の御生涯を終えさせ給ったのである。

上皇の悲劇なる御生涯は実に偉大なる教訓を遺したのである。「人間が極限の状態におかれた時、頼るものは法華経ではなく、浄土三部経であり、称名念仏である」と云う事実を尊き御身を以って御垂世になったのである。

以上後鳥羽上皇と浄土宗について概略を記したが、換言すれば、

一、後鳥羽上皇は列聖中、最も浄土宗に因縁深き御方である事

二、念仏停止も上皇の真意に非ず、方便としてなされ、

事実は浄土宗の擁護者にておわした事

三、口称念仏の最勝、絶対性を証誠なされた事

四、同心同行の範典「無常講式」を御製になり御垂世遊ばされた事。

などである。この由縁深き上皇に対し浄土宗は何も報いていない。浄土宗的廻向は一遍もなされていないのである。承元元年二月十八日、念仏停止のイメージが余りに

も強烈であったため、法敵に等しき錯覚に捉われた因習によるものである事を指摘したい。歴史の実相に基づき上皇への認識を改め、浄土宗との深縁を究明し、その価値高き実証を宗史に正しく位置付けて後世に伝えたいと思うのである。それに依り宗祖の浄土教は更に栄光さんぜんと輝き、不滅の法門の歴史に不朽の光芒を添えるであろう。実に法然上人は不運なる上皇の魂の救済をなされたのであり、上皇は上人の浄土教により安心立命を得させられたのである。

ところでこのように、一天万乗の尊き御身を以って、絶海の孤島で悲恨極りなき御生涯を終えさせ給いし、この御鳥羽上皇増上御菩提のために、本年五月十八日浄土門主総本山知恩院門跡大僧正岸親下を導師に戴き御忌を謹修する事は誠に意義深い事であると思う。かかる大法要は宗務庁又は地元教区が卒先、遂行す可きであり私如きが僭越極りないけれど為宗為教、敢て厳修せんとする次第である。

二 好評発売中 二

松濤弘道著

『既刊』『仏教的生き方とは?』

△浄土選書1▽

新書判二六八頁 価四八〇円

石上善応著

新刊『仏像——その語りかけるもの』

△浄土選書2▽

新書判 二一六頁 価四八〇円

発行所 浄土宗宗務庁

取扱 浄土宗出版事業協会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4

TEL〇三(四三六) 三三五一代

◎ご注文は当法然上人讃仰会にご連絡いただいても結構です。

随 想

心のままに [三]

川 内 知 光
かわうち ちこう

どちらが馬鹿なのか

大正大学の前身の宗教大学時代（大正九年）の夏休みに、北海道及び樺太地方に伝道旅行に行きました。樺太では、角帽がめづらしいのか、子供たちが「四角な帽子だ」と口々にいって、後ろからついて来たりしました。ところで北海道の釧路に行った時のことです。今の金銭に合わないと感じが、出ませんので申しますが、実は面白い少年がいたのです。五十円玉と百円玉と両手に持ってどちらが欲しいと申しますと、五十円の方を「こっち」と言って取ってしまふのです。面白いので、その折にも幾人かの人達がそうしてからかう仕末とあいなり

ました。私が見かねて「坊やこっちの百円の方が多いのだよ」と申しますと、「お兄ちゃんどこから来た」「東京からだ」「また釧路に来るか」「もう来ないだろう」「絶対に来ないか」「絶対に来ない」「それなら教えてやる、こっち（百円玉）をとったら、この次から誰もお金をくれないから、だからわざとこっち（五十円玉）をもらうんだ」と。これは、賢いと思つていいのか、ほんとうにまったく私には判りません。私はそれ以後釧路に行ったことがありませんが、恐らく私のように面喰つた人ものいることでしょう。

杜氏のこゝと

これは戦争中の話で、若い人には興味もななくわがたいかも知れませんが、戦時中「物資動員計画」というのがあって、戦争に必要な物資、次にこれに準ずるものを一級二級として集中的に物資が戦争のために集められたわけです。まことに、平和産業はまったく日の目を見ることができなかった程です。これと同じく労働方も一級二級に集められて、たとえば伏見の酒造業はご存知の通り、冬の農閑期に北陸方面から沢山の酒造りの杜氏が入京して清酒の製作に当たっていたのですが、この杜氏は三級労働というところと異外移動は認められなかったのです。これは兵庫の灘も同じ運命だったのです。私は厚生省に出張しまして、二カ月間抗議のために頑張ったのです。その時の抗議内容は、「酒は青年の入営の際の壮行会に欠くべからざるものです。いよいよ決死隊に出動する時に、ご神酒を頂いて華々しく出発するものです。酒でなくお茶やれといつても、はたして士気が鼓吹できるものか」といったわけです。そうして厚生省もこれを認めてくれて、二級の

扱いとなって酒造りが始まったのです。

当時は酒も配給で仲々ほろ酔い気分になれなかったものです。私はこのように酒造りのために尽したのですが、酒造組合から一合の酒も無理を言わなかったつもりです。そして退官してから、ある日酒粕を差し上げますから受取りに来て下さいといわれるので、家内に行ってもらったのですが、八貫目も下さったのです。その頃はタクシーはなく、荷が重いので親類知人に半分以上差し上げて帰って来ました。かくして狸は入りませんでした、粕汁の毎日が続いたのであります。

菩薩摩訶薩

敗戦後の歳末だったか、その翌年だったかハッキリいたしません、とにかく十二月の初旬からキリスト教のクリスマス・マスのシングルベルのラジオ音楽が全国に流れていたのです。私はある文章を友人に英訳してもらって、マッকারサー元帥宛に呈上したのです。つまりそれは、「マ元帥が敗戦後の日本の生活を民主化するために大変努力

をして下さっていることに対しては敬意を表している者であります、仏教に菩薩摩訶薩という言葉があります。キリスト教のエホバの神さまのようなお方です。私はマ元帥は菩薩マッকারサー（マカサツ）として信仰している者であります、日本国を全部キリスト教一色に塗りつぶすお考えは存じませんが、現在の日本民族のほとんどは数百年の長きに渡って仏教を信奉してまいりました。仏教においても、民主化は充分可能であります。シングルベルによって日本国全部をキリスト教化しようというお考えは、かえって日本国民の反感を買うばかりで逆効果になります」といった文章を送ったのであります。

さてつまらない私の文章が効果したとは思いませんが、クリスマス近くになってるのにシングルベルの音楽が消えてしまったのです。やはりマッকারサー元帥は摩訶薩であると、三十年経った今でも不出世の為政者であると思っているのであります。

大学卒

東山高校（中学も併校）は浄土宗関係の学校ですが、その藤原弘道校長のお話を聞きますと、今年の卒業生五百二十人中五百人は大学に進学志望です。金の卵になった高校卒は二十人程です。そして、中学卒業の九十何パーセントは高校に進学するという事です。この勘定で行きますと、国民の大部分が大学卒業ということになるわけです。まさに大学卒のインフレ状態です。

私達の時代は、大学卒といえほとんどがエリートになれたのです。

株式会社ソニーは、「卒業証書を捨てて来い」という経営方針だそうです。また、M電機は遠慮なく葉っぱ葉服を着せるそうです。今年はまた山崎パンは三百人程大学卒を採用したそうですが、全部パンを運ぶトラックの運転手です。彼らは「僕たちは教室に出ずに麻雀やパチンコばかりしていてアルバイトで労働はしているからトラック運転手の方が適当だ」といったとか……。とにかく、大学は就職のためでなく、いわば教養を身につけるものだという時代に入っているのではないでしょう。

歴大なる仏教の經典の中でも、『維摩經』はとくに一般によく知られている。有名な「維摩の一點譬雷の如し」などと喩えられた「維摩の沈黙」とは、この經典のクライマックスを示す言葉である。普通には大乘仏教の初期の時代（一、二世紀の頃）に成立したとされ、『般若經』の空思想を踏まえた内容で、いわゆる維摩居士が活躍するその独特な物語展開によって空思想の難解な

やかな生活をする一市民として設定されている。実にこの物語は、著名な比丘でも菩薩でもないひとりの在俗の信者である維摩が、傑出した出家比丘や諸菩薩を相手に、その鋭利な才知と軽妙な弁才によって縦横無尽に活躍するのである。まったくそこに登場する比丘たち、つまり有名な「仏陀の十大弟子」や菩薩たちは、すべて維摩の鋭峰に屈する存在なのである。彼ら

（お）（経）（の）（べ）（い）（し）

維摩

經

論理を巧みに表現している。

經典とは一般に釈尊仏陀の説法をまとめたものと解されるが、この『維摩經』は維摩詰（ヴィマールキルティ）という在家居士を主人公に展開し、その維摩居士の深い仏教思想をあますところなく披歴して全篇を形成している。そして維摩居士は、釈尊當時からの自由商業都市ヴァイシャリー（毘舍離）の富裕な長者で、妻子とともに穩

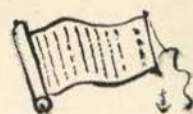
は維摩の弁舌の前にただうなずき、ひたすら称讃を送るばかりである。

このような特色は、『維摩經』の内容の特異性をよく示している。しかし、もとより物語性に富んだドラマティックな内容もさることながら、そこに説かれる教えは、仏教教義の核心をつくものであり、また仏教実践の指標が如実に記されている。ともかく矛盾と逆説の錯綜した表現が、本經の

きわめて常套的な論法であり、それがまた空の世界を明かす論理的基調でもあった。

ところで本經は、原典となるべきサンスクリット本は伝えられていない。ほかの論書に引用されて数行のサンスクリット断片が残っているのは、三種の現存漢訳と一本のチベット訳によらざるを得ない。漢訳はいずれも『大正新脩大藏經』第十四巻に収録されており、翻訳年代順に記せば、三世紀前半の呉の支謙訳『仏說維摩詰經』二卷、五世紀初頭の姚秦の鳩摩羅什訳『維摩詰所說經』三卷、七世紀の唐の玄奘訳『說無垢稱經』六卷の三本であり、チベット訳は『影印北京版西藏大藏經』第三十四巻所収となっている。

これらの中で中国や日本で民間に広く流布したのは鳩摩羅什訳であり、また多くの註釈書の中でも、聖徳太子の「三經義疏」中の『維摩經義疏』なども広く知られている。そして、問答形式による經典の独特な展開や、空思想に基づいた思想内容と相照して、『金剛般若經』などとともに禪家の間では基本的な典籍として重視された。（H）



念佛ひじり三国志

(三六)

一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

歌でも高唱しながら、大原の樹間を遊歩すると、その声がひとときわ澄んで美音になると言われる。声帯を適度にうるおす湿気が流れているからであらうか。

この湿気は、呂川律川という二つの溪流から立ちのぼってきたものかも知れない。

魚山大原寺。

そう総称されたこの樹間に、いつかおびただしい堂塔が建立され、僧たちが棲みつくようになった。そして、その僧たちは朝な夕な、声をふりしぼってメロディにの

せた経文を誦することで、仏菩薩の世界へ接近しようとした。

これを「声明」（しょうみょう）と呼んだ。

声明は、すでに遠く空海によってこの国へ持ちこまれた。実伎はともかく、「声明即実相」という仏教の哲理が、である。凡夫の肉声も信仰の深さによっては仏界の言音に変質する、という考え方だ。

この声明即実相の思想は比叡山へもひろがった。慈覚大師円仁は唐に渡って五台山の引声念仏を導入した。

しかし声明を他の諸行から切り離して独自に発達させたのは良忍上人である。彼は二十三歳のとき、叡山を下

った。大原の来迎院に退隠して、声明三昧にふけた。

すでにそのころ永縁上人は勝林院に住していて、彼一流の声明を門弟たちに教授していた。

良忍は声明を無動寺の麓にある萱尾庵で学んだので、萱尾流と呼ばれ、永縁のは大原流である。

二人はお互いに声技を交流し合った。だがその門弟たちは、やがて自流を主張し、来迎院流と勝林寺流とに分岐していった。

天台声明の基本は、宮・商・角・徴・羽という五音にわかれる。この五音を十二律に照して五調子を調べ、さらに呂律なるリズムも加わって、声楽大系が構成される。「声律秘要鈔」によると、この五音、五調子、呂律が壮大な仏界曼陀羅を歌いあげようとしていることがわかる。

平調は、阿弥陀如来と妙觀察智の仏国土であり、方角は西方、季節は秋、さらに物質で金をあらわしている。

以下は、

双調——阿閼如来——大円鏡智——東——春——木。

黄鐘調——宝生如来——平等性智——南——夏——火。

盤涉調——不空如来——成所作智——北——冬——水。

前号のあらすじ

平維盛もまた法然上人の御説戒を受けた一人であった。紀州那賀郡粉河寺での授戒の様子を「源平盛衰記」は伝えている。高野で明遍僧都と出会う以前のことであった。洛中で並ぶ者がなほの人の徳者として評判高い法然を明遍は意識せずにはいらなかった。敬愛する兄の遊蓮房円照は法然上人に私淑していたが、明遍は学究者としての自身を知っていたし、評判者の底の浅さも見てきていた。やはり、法然に対して一種の疑念をさしはさうのであった。

■後乗房重源に、維盛と法然との出会いの経緯を聞きただそうとしたが、重源は明遍の心を見透かしてか、答えようとはしなかった。不動堂に維盛をたずね、その間の事情を知った明遍は浄土教の往生に興味をおぼえる。法然上人からじかにその教えを聞きたい明遍ではあったが、「私淑」した兄とは違い、「大原談義」という「公的な場」で法然上人とあいまみえることになる。

一越調——大日如来——法界体性智——中——土用——土となる。

つまり五音や五調子を以て五仏、五智、五根、五蔵、五行に割りふるのである。

五音の乱れは、そのまま天下の乱れ、とも言われた。

呂川律川の名称もその呂律から発したものにちがいない。呂律がまわらぬなどという俗語も生んだ。

＜大原の山里—勝林院へ急ぐ明遍＞



とにかく声明三昧に明け暮れる大原の僧たちは、隠遁者であるという定説がいつのころからか立てられた。比叡山上の政治や権力の争刻に、ことさらに無縁であることを主張するからであろう。

いま明遍はその樹間の道を歩いている。走りたくさへなっていた。勝林院に隠居する中納言法印の顕真に一刻も早く会いたかったのであった。

すでに久しく会っていなかった。あの承安三年（一一七二）以来のことだった。

その五月二十五日、顕真は清涼殿における最勝講の堂で、満座を白けさせる狼藉をはたらいた。

興福寺の相覚が問者となって、天台止観に関する質疑を次々と発した。法論と呼ぶほどの内容ではない。形式であった。

比叡山の法橋知海はこれに答えるわけだが、すでに老境、極度に耳が遠かった。当然かたわらに控えた助者の顕真が介添えをする手筈だった。

だが、顕真は黙したまま一語も発しようとはしない。法橋知海は何とかして言葉をとらえようと、耳に手をかけ、当惑の表情だ。

問者も立場窮し、満座はいら立った。

その状況を、南都からの出講僧だった明遍は、つい昨日のここのように記憶していた。

情況だけではない。直後の清涼殿前庭で、明遍は顕真自身の口から決意の言葉もじかに聞いた。

「……思う所存あつて、今後いっさい晴れがましい席へは顔を出さぬことにきめました」

出離退隱の決意であった。

さらに、師である天台座主明雲を皮肉った言葉も耳にした。

当然、翌年の最勝講に顕真の姿はなかった。そればかりか宮廷が催おす如何なる仏事の席からも遠ざかった。

大原の勝林院に籠居したまま、動いた、という消息を明遍は聞かなかつた。

すでに八年の空白。だが明遍がいま気楽に顕真との再会に足を運ばせるものは、お互いに葉室一族という姻戚関係にあったからだ。ただし血流はない。

顕真は葉室流藤原家、為房の長男為隆の娘と、次男顕隆の長子との間に生まれた子であった。そして為房の三男長隆の未亡人（高階重仲の娘）は、明遍の父信西入道の

最初の妻でもあった。

当時、四十カ寺を越えていたと伝えられる大原の塔中からは、それぞれの流儀の声明が流れていた。

風景として、それは如何にも奥ゆかしかった。仏菩薩の世界へ迫る美々しいひとすじの道にすら思えた。

「しかし、これではいけないんだ」

と、道をゆく明遍は耳に蓋をかぶせたかった。

なぜ、いけないのか。

退隱が、である。

この乱世、救いの手をさしのべねばならぬ人間がうごめいている。隠逸とは、彼らに眼をそむけた利己にすぎぬではないか。

声明の五音五調子、そこから五仏五智を求めるだけでは、許されない。

苦悩の人々は、生まな五仏の体温を、今日生きるための菩薩の智慧を欲しているのではないか。

明遍の足は、いら立たしく樹林の落葉を蹴った。

二一

久々の再会は、やはり八年前の最勝講の話題からであ

った。

「あの日、法印は悪しきまに明雲座主のことを罵られましたな」

「そんなこともあったかな」

顯真は微笑んだ。五十路を迎えた男盛りである。八年に及んだ退隱の贅は、面上にひとすじも差してはいなかった。

「その明雲座主が法住寺で非業な最期を遂げられたとき、首級は法印がお引き取りになったとか」

法住寺合戦。

京都へ乱入した木曾義仲を、明雲座主が比叡山の惡僧をひきいてむかえ撃った戦闘のことだ。

「小禪師。師の首級を引きとるのは、弟子として当然であらう」

顯真は、小禪師の明遍を昔の呼び名で、呼んだ。そこには、隱遁者にならない客気がよみがえっている。八年前の出離の決意に違背した、と明遍が詰問したように取りちがえたのであらう。

「いや、それは当然のこと……座主の首級をごらんになって、法印はどのような感慨をおぼえられましたか」

明遍、じつは誘導を謀っていたのである。

「まことにお願いしたわしく、情けない思いであった。身は天台座主におわすのであるぞ。僧俗の頂点に立たれるお方だ。往生の素懷にみちびくお方が、猛々しく武装した姿で首を刳ねられている」

「乱世でありますのう」

「そのとおりだ。仏法も地に落ちた」

「乱世だ、仏法の終末だ、と嘆いていてばかりで良いのでしょうか」

明遍は徐々に話題を、今日の来意へ誘導してゆく。

「では、何をする？」

顯真の眼が光った。

「権門に分け入り、政務へ口出しをするのは、無論益なき愚かなことです。そんなものは無視して、じかに下々へ救いの手をさしのべてこそ、今日を生きる仏者の道ではありますまいか」

熱弁をふるう小禪師——明遍に顯真はじつと見入る。

「どうしたら下々へじかに救いの手がさしのべられるのか」

「それは、誰にでもわかる方法、易しい実践行のすすめ

る以外にござりますまい。難解な摩訶止観や私が学んだ三論義など、到底下々は受け付けませぬ」

「となると、法然の易行念仏か」

顕真はかたわらに控える侍者をかえりみて、つぶやいた。

この侍は相模房という名の僧で、十余日ほど前、東山吉水に法然上人を訪ねていた。顕真から法然の易行念仏について聴聞して来い、と命ぜられたからである。

善導義の称名念仏。

顕真は相模房がもたらした法然の主唱を、曇鸞、道綽にさかのぼり目下研鑽中なのであった。

明遍は言葉が続ける。

「一度その法然房を招いて、とっくりと所説を聞いてみては如何でしょうか。天台随一の学匠である法印、また口ゆったい申し分ながら三論義では誰にもおくれをとらぬ私です。この兩名を説伏できるような所説であれば……」

法然の念仏義を天下へ唱導してもよいのではないかと明遍は力説する。

顕真にも異存はあり得なかった。

目下研鑽中なので、なおしばらく日時を貸してもらってから、と条件を付するにとどまった。

こうして大原談義の根まわしが開始される。

根まわし……と書いたが、法然諸伝における大原談義（問答）の根まわしは、おおむね次のように一致している。隠通中の顕真法印が永弁法印に出難解脱の要諦を問うたところ、「それは法然上人に会って聞くのが適当でしょう」と答えた。

顕真はただちに相模房を吉水の法然房のもとへ派した。ひととおり主意をただしたあと、顕真は百日間、浄土の源流を研鑽し、文治二年秋のころ、大原の勝林院丈六堂に法然上人を招じたという経緯になっている。

諸伝によつては勝林院を竜禅寺としてあるが、顕真は竜禅院と号したから、住房をそう呼んだのであろう（田村円澄『法然上人伝の研究』）。

当日は、光明山の僧都明遍、笠置寺の解脱上人、大原山の本成坊、東大寺勸進修乘房（俊乘房重源）、嵯峨往生院の念仏坊、大原来迎院の明定坊、菩提山長尾の蓮光坊、法印大僧都智海、法印権大僧都証真。

南都北嶺の学匠の一流どころがずらり顔をそろえた、

＜大原談義＞



と「源空私日記」は記している。ほかに聴衆は三百人を越えた。

法然は、問者本成坊の質疑に答えて、「浄土の宗義、念仏の功德、弥陀本願の旨」を明々とこれを説いた。

本成坊は黙然し、信伏したという。また集会の人々は悉く歎喜の涙を流し、法然の所説に帰伏した。

其ノ時ヨリ彼聖人（法然）ノ念仏宗興盛ナリ

と、「源空私日記」は結んだ。

源空上人、マコトニハ弥陀如来ノ応現カトゾ感嘆シ
アリケル。法印（顕真）香炉ヲトリ高声念仏ヲハジ
メ、行導シ給フニ大衆ミナ同音ニ念仏を修スルコト
三日三夜越エ、山谷ニミチヒビキ、林野を動かス。
信ヲオコシ縁ヲ結ブ人、多カリキ。

とは「四十八巻伝」の記述である。

多少の舞文はあったにしても大原談義が法然の盛名を天下に弘め、称名念仏を隆盛にした契機となった事実は

まぎれもないところである。

またこの四年後（文治六年）に天台座主に補せられた法印顯真が強い念仏思想を抱懐するに至った事情も明らかである。

九条兼実はその日記「玉葉」で、

顯真遁世ノ年久シク、偏エニ念仏ノ一門ニ入り、
真言ノ万行ヲ棄テ、

と記して、天台座主の資格に疑惑を投げかけている。

日蓮上人に至っては、

天台宗は衰微の極にきて座主明雲は叡山を真言宗に造り変えてしまい、六十一代の座主顯真は、法華真言を捨てて一向謗法の法然の弟子となった。

と酷評もしている。

教義上で顯真法印以下がこの大原談義で法然の念仏義に信伏したことは間違いないが、仏教史上におけるこのデモンストレーションへの位置づけには、さまざまな推理が組み立てられるであろう。

まず、その根まわしである。

三

聖光坊弁長、浄土宗の二祖となった鎮西上人の「末代念仏授手印」は浄土宗の血脈として、

天台貫首大原顯真和尚

東大寺明遍僧都

黒谷法然上人

三人を並記して血脈相伝の先達とする。

さらに付記して、

己上ノ三人ハ同時ノ学生、三人トモニ善導ノ御義ニ帰シ、西方ヲ願ジ給フ。三人同時ノ学生トモニ数遍ノ行儀ナリ。コレヲ以テコレヲ知ルベシ。コノホカノ小人等ノ義、全クコレヲ用フベカラズ。三人ノ大人ノ義ハ末代ノ人コレヲ用フベシ。

と明記している。

鎮西上人が大原談義に臨席した可能性は濃厚である。

いや、臨席したからこそ彼は血脈相伝の重要なポストに「明遍僧都」を加えているのではあるまいか。

法然の諸伝は、法然と明遍との出会いを、ずっと後年のこととする。この大原談義では、なぜかその存在を黙視している。南部北嶺の学匠が総結集した、その構成員として名を飾った、という程度の扱いでさえある。

鎮西上人が大原談義に列した可能性は強い。むしろ当時二十四歳、比叡山東塔の南谷で天台学を学んでいたさなかである、彼の師は法印権大僧都証真(金地房)であった。師に従って勝林院へ下っていったと思われる。

そこで大原談義の浄土宗における歴史的位置づけを明確にし、顕真法印、明遍僧都という先達を、師の法然と並記して、血脈相伝を跡づけたのであらう。

では明遍僧都が大原談義に果たした役割は何であらうか。

明遍の姿だけを追っていると、実体は見失われる。当時、彼とつねに行動思想を共にした俊乗房重源との二重写しのネガにおいて、それをとらえるべきではなからうか。

重源の大原談義における登場の仕方は、いかにも大仰

で、にぎにぎしい。門第三十余人を引きつれて大原へ乗りこんでいる。

そればかりか、問答後の三日三晩、不断念仏を修し終ったあと、「阿弥陀号」の提案をしている。

すなわち僧俗を問わず、阿弥陀号を付するようになったらどうか。死後、地獄へ落ちかかり、閻魔さまの前で名を問われたとき、阿弥陀という号があれば、閻魔もびっくりして極楽浄土の方へその亡者を押し戻してしまおうであらう。

そんな提案を法然諸伝は末尾に記して、

自ラ南無阿弥陀仏トゾ号セラレケル。コレ我ガ朝ノ阿弥陀仏名ノハジメナリ(四十八巻伝)

とも書いた。

南部北嶺の学匠が集ってのきびしい問答、後年の法然をして、

「聖道門と浄土門との論義において、法門は牛角で優秀はなかったが、現在どちらがふさわしいか、という掘根比べでは私が勝った、と思う」

とまで回想させたほどだ。

そんなきびしい学問的な雰囲気なかで、重源の阿弥陀号提案は、いかにもユーモラスで、庶民的である。

だが此処あたりには、大原談義根まわしの実体がひそんでいて、と筆者は推量したのである。

俊乗房重源の「阿弥陀号」授与は、すでに以前から実施されていたとみたい。大仏勧進の代償として、門弟や寄進者に阿号を贈与したことであろう。

ことさらに大原談義に持ち出すほどのこともなかった。

いや、この大原談義の集り自体が、重源や明遍らが仏法の大衆実践化をねらった快挙だった、と筆者は考えたのである。

法然諸伝では、いかにも法然がこの結集の主役をなしていたかのようである。

しかし「沙石集」では、法然に顕真から浄土の要義を問法させるスタイルになっている。顕真法印の講説が終ったあと、法然と重源はこもこも感動した、とさえ書いてある。

善導の専修念仏義にして、すでに十二年、今更法然が

浄土の要義を顕真から問法したとは思われない。智慧第一の法然房は、その方面では權威、専門家であったはずだ。

ただし既成教団の身分立場から考えたとき、顕真が主であり、法然が従となるのは当然のことであらう。

法印顕真が法然を招いて、その所説を聞いたことはまぎれもない事実であるし、それに信伏した点も嘘ではあるまい。

では顕真がなぜ法然という一介の念仏ひじりを招いたのか。その根まわしを誰がしたのか。大原に籠居している隠逸の顕真法印を、誰がこの下界へ連れ出そうとしたのか。

まさしく念仏布教は、下界の仕事である。重源の「阿弥陀号」でも判るように、貴族出身の高僧たちにとって「下世話」とも言うべきであらう。

やはり俊乗房重源、そして顕真に、血統からも權威ある学匠の立場からも近かった明遍僧都の存在が重量を増してくる。筆者が小説記述の舞台上に明遍を登場させた論拠が、ここにある。

ところで、この時点における顕真法印が置かれた立場

にも少し触れておかねばなるまい。

顯真は、気分としては遁世にひたりきっていたかたであろうが、天台血脈という大義を考えたとき、じつは大原などに籠居はしておれなかったのである。

「山家要略記」という古草子が叡山文庫にある、と聞く。記者は顯真座主と言われ、内容は天台血脈の正統を明らかにしている。

伝教大師に初まって円仁、承雲、尊意の諸師に相承された血脈は、正流を梶井門跡へと結びつける。つまり中世以降は梶井門跡流こそ正統だと顯真は強調している。むろんこの所説は弟子の仁快、承快にとって作成されもした。

梶井門跡流は、この文治年間、明雲座主で跡が消えた。現座主の全玄僧正は正統とは言いがたく、九条兼実との私的関係において就任した人である。

ちなみに明雲が法住寺合戦で横死したあと、天台座主はわずか六年間に三人も交替する。寿永二年の二月十二日に俊堯が補せられたが、一年後には全玄がその座を襲う。全玄の在位五年間も不安定きわまりない。延暦寺の衆徒が騒いで、何度か逐電する。

文治六年三月四日、ついに全玄は公顯に地位をゆずる。公顯僧正が在位したのは、何と二日間だけであった。突如として顯真法印が天台座主に就任するのである。

二日間だけで前座主を追った。この事実はクーデターの匂いを嗅がせる。クーデターの主謀者である顯真法印を、大原の隠逸と言い得るであろうか。

この当時、権門貴族の遁世ほどアテにならぬものはない。僧侶社会にあっても同断である。

顯真の跡をおそって第六十二代の天台座主となった慈円僧正も、就任直前までは西山の善峰に通世していたのである。

隠遁すれば、人は表座敷へ引っぱり出したがる。隠遁は以前の経緯を払拭する「政治的亡命」をも意味したかも知れない。だから権門の地位に就くためには隠遁が必要であった。それがエチケットであり、ルールでもあったようである。

だから大原談義の前後、顯真法印が比叡山の権門支配へ復活する意図が充分にあった、と断じては誤まりではあるまい。

平家に密着しすぎた師の明雲僧正。承安三年の最勝講における失脚隠遁は、顯真自身がそこから離脱する意図だったかも知れない。

ともかく明雲のあおりを喰って、さらには実弟の慈円を親しかった全玄僧正に続いて座主に推挙しようとする九条兼実の忌避をやわらげるためにも大原へ引きこもらねばならなかったのであろう。

機は熟しつつあった。

山上の延暦寺では僧徒たちが顯真の錦の御旗とも言うべき「梶井門跡流」に同調する者が増大しつつあった。

一説にはこの大原談義を文治五年の秋とする。それはいよいよ顯真復活のクーデターと時間的に接近してくる。

同じ年の十二月十四日、延暦寺の僧徒は座主全玄を追放するからである。いったんは院宣でその地位に復するが翌年の三月四日、前の僧正公顯と交替した。この公顯がわずか二日間の在位で顯真に譲位していることは、前にも触れた。

天台教団の相承血脈について、顯真が書き残したと思われる文書は「山家要略記」のほかにも数々あるらし

い。

大原の顯真こそは「記家」の創始者だ、と現代の天台学者は指摘している。「記家」とは比叡山の記録故実を書きとめる専門家の称である。血脈相承はその重要な部分でもある。

山上の権門支配を放外した隠遁者が、こうした仕事の創始者になるであらうか。

ちなみに文治六年三月、天台座主となった顯真は、在位二年半ほどで生涯を閉じている。座主になった以後にこうした記録類をまとめたとは思われない。

顯真が権勢復活の手段として、大衆人氣に投じていた法然の念仏義を利用したとは、充分に推察し得るであらう。そしてこうした機微に乗じて念仏興隆を謀った重源や明遍の根まわし――

大原談義の背景として、これらの事実を見落すわけにはいかなのである。

では、その談義に実累に近いものを再現してみることにはしようか。

(つづく)

二 編集後記 二

○春たけなわの四月、咲きほころぶ花々の中で、明かるい光が満ちあふれている。しかし桜咲く花時（はなとき）のこの時分は、陽気が比較的変りやすく、「花冷（はなびえ）」などという情趣のある言葉もあるように、時にうすら寒いものを感じることもある。「花開く時風雨多し」とは、よくいわれることであるが、花時の風やそほ降る雨に寄せて、

咲満る花に淋しき曇り哉

子規

小夜ふけて散りぬる花か枕べに 草城

などという秀句に接すると、私たちの心もなにか切なくしめつけられる想いがする。

もとより、花のといえは桜の花、その万葉（ばんだ）の桜のあわただし散りさまは、本来愛惜なることひとしおのものがある。

○この春の花の爛漫の好季に、浄土宗では總本山の知恩院（四月十九日―二十五日）や各大本山、あるいは全国のあちこちの寺

寺で、宗祖法然上人の忌日にちなんで、御忌会（ぎよきえ）が修法される。もちろん法然上人の入寂されたのは、建暦二年（一二二二）の正月二十五日であるが、現在ではこの花薫る新緑の時節を選んで営まれるようになったのである。私たちもはるかに宗祖上人の遺徳をしのんで、念仏の精進に時々刻々怠りないようにしたいものである。

○さて、年度が改まった四月、新入生や新入社員のフレッシュ・マンたちの生き生きとした出発に、どこの街角でも新しい活力がみなぎっている。ところで、このまっすぐな汚れなきエネルギーを十二分にも生かさなければならぬのは、やはり大人社会の責任であろう。「水は器に 従いて」その様々に なりぬなり」（「金剛石」より）とも歌われるように、その容器づくりは大人の役割りとして精一杯に果たさなければなるまい。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十三巻 四月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十二年三月二十五日 印刷

昭和五十二年四月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

＝新刊＝

大正大学教授 竹 中 信 常 著

『タ ブ ー の 研 究』

—文部省科学研究費助成出版—

A 5 判 450頁 定価 8,500 円

- ◎ 宗教学界の権威である著者が、新しい角度からタブー理論を集大成され、さらに数々の身近な事例を踏まえて体系的にまとめられた大書である。皆様のご購読を是非おすすめしたい。

発 行 山喜房仏書林

東京・本郷・東大赤門前
電 話 (03) 811—5361

＝好評発売中＝

大正大学教授 安 居 香 山 著

『予言と革命 —ここにも大変革の危機がある—』

B 6 判 250頁 定価 850円

- ◎ 予言の書「緯書」の研究者である著者が、自然的破滅でなく人間自身による日本滅亡の危機のあることを、中国・日本の歴史を辿りながら、予言や易の流行する現代社会に訴えた問題の書!!

— 目 次 —

○ここにも大変革の予言がある○予言で定められた日本の紀元
○世直しの改元と予言○予言にゆらいだ日本の歴史○予言で亡んだ始皇帝○中国の歴史を左右した予言革命○予言はどうして歴史を動かすか○予言革命の温床○現代でも予言革命はおこる

発売元 探 究 社

〒605 京都市東山区清閑寺山内46-5

中住ビル3F

(振替) 京都 21185

取扱い 法然上人鑽仰会

〒102

東京都千代田区飯田橋1-11-6
振 替 (東 京) 8—82187